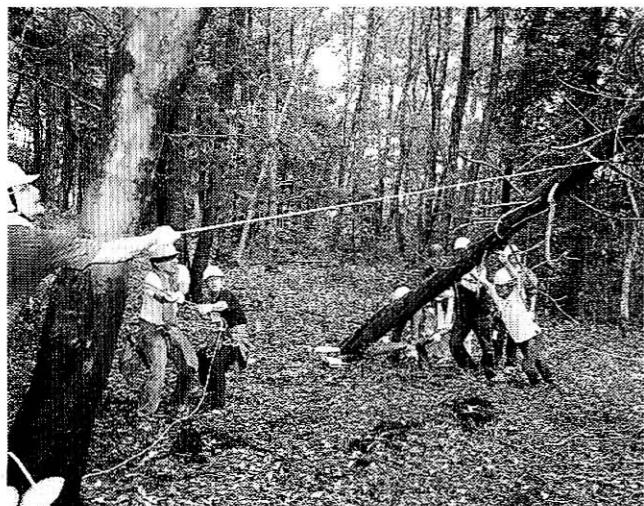


特色ある取り組み 現代GP



裏山を整備し、「癒やしの森」づくりをする駿河台大学の学生やボランティア=埼玉県飯能市、山谷勉撮影

「癒やしの森」育てる

駿河台大

のこぎり手に里山守る授業

大学の裏に、里山がある。キャンパスの敷地の半分は、手つかずのまま残されている森だ。この里山の整備を、学生と地域のボランティアが一緒になって始めた。土曜日、「森林文化」の授業で、学生たちはのこぎりを手に里山に入る。スギ、ヒノキ、コナラなどが50年前に植えられた。しかし、林業が廃れ、いまでは雑木となり放置されたままだ。木を切り倒し、道を整備し、散策ができる

「癒やしの森」を目指している。ほとんどの学生が初めて、「のこぎり」を使う。最初はおそるおそる、そして、先生や地域の人々に教えてもらひながら、ヒノキを倒していく。「どつちに倒すと安全かな」と話し合う。原聰・副学長が「焦らず、ゆっくり。よく方向を見ながら、のこぎりをひいて」と指導する。

木を倒す時、全員が協力する。ひもをかけて、引つ張る人、木を押し倒す人。「ズドーン」。20歳以上の人も一緒に手をたたいた。「やった!」「すっげえテンション上がるな」。一本の木を倒すのに30分以上かかった。法学部の真鍋英邦さん(22)は「切つけかりのヒノキは、むせかえるような濃いにおいがする。達成感がある」と満足そうだ。

駿河台大学では「森林文化」の授業を07年度から始めた。学部に關係なく受けられ、120人の希望者が集まつた。今年は、講義と外での活動の2講座に分けた。森に入つて活動する講座は人気のため抽選になつた。

4月には、ナメコ、シイタケ、ヒラタケのキノコを3千個植えた。木や菌の種類、発生場所などを勉強したうえでの実践だ。ほど

とおり放題されたままだ。木を切り倒し、道を整備し、散策できる

時代のニーズを考え、特色ある活動をする大学に、文部科学省は重点的に補助金を出している。「Good Practice(GP、優れた取り組み)」。社会的要請が強い課題に対応した「現代的教育ニーズ取組支援プログラム

(現代GP)」と、すでに実績を上げているものが対象の「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」の二つが知られる。現代GPから、「地域再生」と「環境保護」に取り組む2大学を紹介する。

実社会に一役

心に残つていくと思う」。

大学がある埼玉県飯能市は、市

の7割以上を森林が占める。大学

は「駿大の森」100年協定を、

市と結んだ。市の森25haを100

年間無償で借りて、豊かな落葉樹

の森に変えていく計画だ。すでに

ブナや山桜など1100本の苗木

を植えた。原副学長は「最近の学

生は、すぐに結果が出ることを求

める。でも、長い目で物を考える

姿勢を養いたい」と話す。

木を切り、下草を刈る。間伐材

で道をつくる。癒やしの道が完成

するのは、何年も先だ。これか

ら、何人の後輩がかかわること

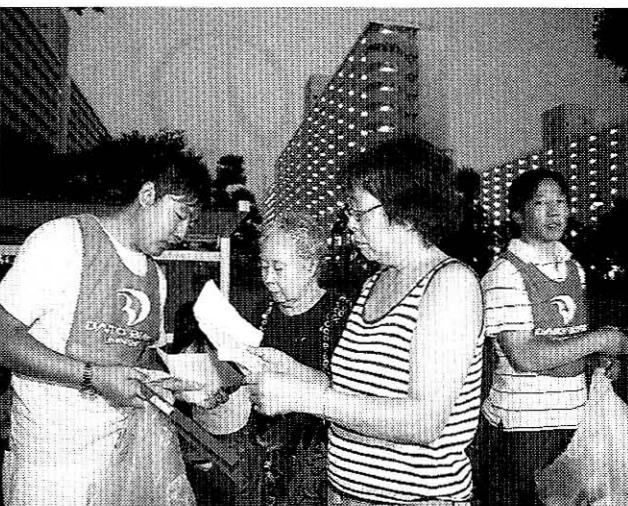
になる。すぐに結果が出ないこと

にも、今、地道に取り組む。学生

たちも、いつか癒やしの森に帰つ

てくることを楽しみにしている。

5~14階の集合住宅計64棟が立ち並ぶ東京・高島平団地。日が落ち、家路を急ぐ人に交じって、敷地のごみを拾つて歩く大学生が多い。 「クリーニングアップ隊」と書かれたそいのベストを着ている。中国・内モンゴル自治区から、団地近くにある大東文化大学に留学している環境創造学部4年、ガ・ルディさん(34)らのボランティア活動だ。活動は週に1回。「トングの扱



清掃活動をしながら地元の住民と交流するウ・ホンカンさん(左)とガ・ルディさん(右)=小暮誠撮影

いにも慣れました」とガさん。吸い殻や菓子の包装紙をさっと取つてポリ袋に入れる、通りかかつた住民から声がかかる。

「ありがたいねえ」

が終わつたら、次はパトロール。団地内の駐車場や駐輪場を自転車で見て回る。合わせて約1時間半かかる。

大東文化大の「高島平再生プロジェクト」は07年度、文部科学省の現代GPに採択された。団地の一部を借り上げて学生を住ませ、住民と交流しながら、地域を活性化できる人材育成を目指す。その期待を担い、今春入居したのが、ガさんら留学生8人を含む16人だ。

長野県出身の文学部3年、篠田悠次さん(20)は「壁を隔てて隣に人がいる団地の生活は新鮮」。初めは隣室の音が気になつたが、今は声が聞こえないと心配になれる。内モンゴル自治区からの留学生で、環境創造学部3年のウ・ホンカンさん(29)は「地域の人と交流を楽しんでいたうちに日本語も上達する」と満足そうだ。

プロジェクトで中心的な役割を果たしているのが、空き店舗を改装して設けたカフェだ。住民と学生の交流拠点と位置づける。

開店は原則、月々金曜だが、土、日も開くことが多い。団地に連日のように「学び合いの講座」がある。留学生が教える中国語や韓国語教室に書道教室、ハーモニによる演奏会、落語など。学生も住民もボランティアで自分の得意なことを生かし、教え合つたり一緒に楽しんだりする。

高島平団地は72年に入居が始まつた。人口は今、約2万人。ピクの3分の2だ。65歳以上の高齢者がその3割を占め、人口減と高齢化が同時に進む。一方、大学側は少子化で学生確保が難しい。プロジェクトを引っ張る環境創造学部の山本孝則教授は「すぐ近くにある両者がともに、持続が難しい状態に陥つていた」と言う。

入居していない学生も巻き込み、

連日のように「学び合いの講座」

がある。留学生が教える中国語や

韓国語教室に書道教室、ハーモニ

による演奏会、落語など。学生も住民もボランティアで

自分の得意なことを生かし、教え

合つたり一緒に楽しんだりする。

高島平団地は72年に入居が始まつた。人口は今、約2万人。ピク

クの3分の2だ。65歳以上の高齢者がその3割を占め、人口減と高齢化が同時に進む。一方、大学側は少子化で学生確保が難しい。プロジェクトを引っ張る環境創造学部の山本孝則教授は「すぐ近くに

ある両者がともに、持続が難しい状態に陥つていた」と言う。

田地という居住の場でのボランティア。山本教授は「学生は受け身でいる間は成長は遅いが、情報

を出す側に回ると猛烈に伸びる」と人材育成の効用を説く。「内容

はもちろん、接し方や相手の気持ちを読み取ることも含めて魅力的

でなければ、地域の人は来てくれないから」

木に電動ドリルで穴をあけて、キ

ヒラタケのキノコを3千個植えた。木や菌の種類、発生場所などを勉強したうえでの実践だ。ほど

とおり放題されたままだ。木を切り倒し、道を整備し、散策できる

「癒やしの森」づくりの活動をし

ている「高島平地区小地域ネットワーク」の堀口吉四孝さん(59)

は、学生を受け入れた団地の側に

も変化の兆しが出てきたを感じ

ている。「学生がこの街を何とか

したがつているのだから、『自分たちに何ができるか』と触発され

ている人は少なくない。学生のア

イデアでこの街は確実に変わる

団地に住み、新風吹き込む

入居していない学生も巻き込み、連日のように「学び合いの講座」がある。留学生が教える中国語や韓国語教室に書道教室、ハーモニによる演奏会、落語など。学生も住民もボランティアで自分の得意なことを生かし、教え合つたり一緒に楽しんだりする。

高島平団地は72年に入居が始まつた。人口は今、約2万人。ピク

クの3分の2だ。65歳以上の高齢者がその3割を占め、人口減と高齢化が同時に進む。一方、大学側は少子化で学生確保が難しい。プロジェクトを引っ張る環境創造学部の山本孝則教授は「すぐ近くに

ある両者がともに、持続が難しい状態に陥つていた」と言う。

田地という居住の場でのボラン

ティア。山本教授は「学生は受け

身でいる間は成長は遅いが、情報

を出す側に回ると猛烈に伸びる」と人材育成の効用を説く。「内容

はもちろん、接し方や相手の気持ちを読み取ることも含めて魅力的

でなければ、地域の人は来てくれ

ませんから」

木に電動ドリルで穴をあけて、キ

ヒラタケのキノコを3千個植えた。木や菌の種類、発生場所などを勉強したうえでの実践だ。ほど

とおり放題されたままだ。木を切り倒し、道を整備し、散策できる

「癒やしの森」づくりの活動をし

ている「高島平地区小地域ネットワーク」の堀口吉四孝さん(59)

は、学生を受け入れた団地の側に

も変化の兆しが出てきたを感じ

ている。「学生がこの街を何とか

したがつているのだから、『自分たちに何ができるか』と触発され

ている人は少なくない。学生のア

イデアでこの街は確実に変わる

木を切り、下草を刈る。間伐材で道をつくる。癒やしの道が完成するのは、何年も先だ。これらは、すぐ結果が出ることを求める。でも、長い目で物を考える姿勢を養いたい」と話す。

木を切り、下草を刈る。間伐材

で道をつくる。癒やしの道が完成

するのは、何年も先だ。これらは、

すぐ結果が出ることを求める。でも、長い目で物を考える

姿勢を養いたい」と話す。

木を切り、下草を刈る。間伐材

で道をつくる。癒やしの道が完成

するのは、何年も先だ。これらは、

すぐ結果が出ることを求める。でも、長い目で物を考える

姿勢を養いたい」と話す。